

## <第115回国際ARCセミナー(上野隆三氏)レビュー>

# 浮世絵から見る“三国志”の日本における受容 ——“水滸伝”との対比を通して

戸塚 史織(立命館大学大学院文学研究科/日本学術振興会特別研究員<DC>)

E-mail [lt0875sf@ed.ritsumei.ac.jp](mailto:lt0875sf@ed.ritsumei.ac.jp)

### 1. はじめに

本稿は2023年4月12日に開催された「第115回国際ARCセミナー」における上野隆三氏<sup>1)</sup>による発表<sup>2)</sup>について報告するものである。氏は、日本における“三国志”と“水滸伝”の受容の流れを通史的に説明し、関連する浮世絵および歌舞伎の分析から、両作品の江戸時代の一般庶民の受容状況について検討された。

### 2. 発表内容

#### 2-1. “三国志”と“水滸伝”の日本における受容

##### (1) “三国志”の日本における受容

『三国志』は中国の蜀・魏・呉の三国時代を記した歴史書で、晋の時代に陳寿によって正史『三国志』が編集された。その後西暦429年に完成をみた南北朝時代の南朝宋の裴松之による詳細な注には既に寓話のような話が見られ<sup>3)</sup>、唐代には早くも三国に纏わる様々な伝説が生まれ、語り物の題材になっていた可能性もある。宋代に至ると三国志関連の語り物演目が確認でき、元代に纏められた『三国志平話』はこうした語り物の台本等を集約したものと考えられる。元代には元雑劇や元曲が発展し、多くの三国劇が上演された。これらの芸能の内容を纏める形で、元代末から明代初め頃に長編白話小説『三国志演義』が完成したとされる。

正史『三国志』は他の史書同様比較的早く日本に流入したと思われ、平安・鎌倉時代には知識人が読んでいたと推測される。小説『三国志演義』の正確な伝来年は不明だが<sup>4)</sup>、日本最古の記録は林羅山<sup>5)</sup>の慶長9(1604)年の読書目録の『通俗演義三国志』であるため、江戸時代以前、安土桃山・室町時代に伝来したと推定される。なお伝来当初は訓読で読まれたと考えられる。

元禄2(1689)年には日本初の翻訳『通俗三国志』<sup>6)</sup>が出版され、後に挿絵入りの翻刻本も多く出版された。天保7(1836)年から出版が始まった葛飾戴斗画<sup>7)</sup>『繪本通俗三国志』はその決定版となった。明治時代になっても『通俗三国志』を参考にした『三国志演義』の訳本が複数作られる。

昭和に入ると吉川英治の翻案小説『三国志』<sup>8)</sup>が大ヒットし、“三国志”人気を牽引した。横山光輝の漫画『三国志』も吉川英治作品を基にしたとされ、人形劇やPCゲームの『三国志』も人気を博した。こうして様々な媒体で多様な内容の『三国志』が作られ、多くの日本人が『三国志演義』の内容を知るようになった。

##### (2) “水滸伝”の日本における受容

小説『水滸伝』も『三国志演義』とはほぼ同時期に日本に伝来したものと推測される<sup>9)</sup>。白話文学とはいえ比較的言語的表現が多く、当時の日本人にも読みやすかったであろう『三国志演義』に対し、『水滸伝』は非常に口語的で難解に感じられた<sup>10)</sup>と考えられるが、江戸時代には享保12(1727)年の岡白駒による『水滸伝訳解』を皮切りに『水滸伝』の注釈本、訓点本、翻訳本が多数出版された<sup>11)</sup>。明治時代にも幸田露伴『国訳忠義水滸全書』が出ている。

しかし昭和に入り、『三国志』を大ヒットさせた吉川英治『新・水滸伝』は未完に終わり、横山光輝は漫画『三国志』の前に『水滸伝』を描いたが大きな反響は得られなかったためか話の多くの部分が省かれている。

こうしたこともあってか、現在の日本では『水滸伝』はあまり有名とは言えない。

##### (3) 現在の日本における“三国志”と“水滸伝”

一般的に『三国志演義』関連の事物も“三国志”と呼ばれており、正史『三国志』と小説『三国志演義』の違いがどれだけ認識されているかは疑問だが、いずれにせよ現在の日本では、“三国志”は広く認知されている一方で、“水滸伝”の認知度は劣る。この差の一因として、『三国志演義』が時代順に多くの英雄達が描かれるのに対し、“水滸伝”は108人もの登場人物が一堂に会し、名前を覚えるだけでも難解なことが考えられる。

#### 2-2. 浮世絵にみる“三国志”と“水滸伝”

現在の日本では“水滸伝”より“三国志”の方が認知度が高いが、江戸時代の庶民の間では異なる状況が

あった可能性がある。例えば小説『南総里見八犬伝』には“水滸伝”の影響が指摘されている。立命館大学アート・リサーチセンター(以下 ARC)の浮世絵ポータルデータベース<sup>12)</sup>に収集された浮世絵を使い、数の比較によって傾向を把握し考察してみたい。

まず“三国志”関連の浮世絵を調べると、キーワード検索で160件<sup>13)</sup>の結果が得られる。図1の国芳の作をはじめ、作品は江戸後期から末期に集中しており、これには『通俗三国志』以降、特に『絵本通俗三国志』の流行の影響があると推測される。また、女性を“三国志”の場面に見立てて描いたものや、相撲取りが桃園結義を模した図がある「見立三国志」がある。しかしこれらの作品に“三国志”の内容から外れたものは見られず、あくまでも“三国志”を基にしたものである<sup>14)</sup>。



(左) 図1 歌川国芳「通俗三国志 英雄之老人」(東京都立中央図書館所蔵・921-C001-004)

(右) 図2 歌川国芳「水滸伝豪傑百八人 天罡星 三十六員 四枚内」(立命館大学アート・リサーチセンター所蔵・arcUP3242)

一方キーワード“水滸伝”で検索すると、1097件の結果が得られる。詳細を見ると、例えば国芳<sup>15)</sup>の「美勇水滸伝」【図2】等、小説『水滸伝』とは関係のない優れた武者<sup>16)</sup>が集結した絵も含まれている。本作の“水滸伝”の語は小説の内容から離れて、優れた人材が一堂に会している状況を表現していると考えられる。これらの作品を理解するには、まず「水滸伝」が多数の豪傑が活躍する小説であることを知っている必要がある。

つまり、残存する浮世絵の数量的傾向を見る限りでは“三国志”関連の作品より“水滸伝”関連の作品が圧倒的に多く、江戸時代には“水滸伝”の方が親しまれていた可能性がある。また“三国志”の語を「英雄譜」という意味で使ったものは見られないのに対し、“水滸伝”は優れた人材が一同に会している様子を表現する語として浸透していた様子が伺える。

### 2-3. 歌舞伎における“三国志”と“水滸伝”

江戸時代の“水滸伝”の認知度に大きく影響したと考えられるのが歌舞伎である。歌舞伎の演目には「和

訓水滸伝」や「天保水滸伝」等があり、これらの演目に関連する浮世絵も残存している。

ARC 番付ポータルデータベース<sup>17)</sup>での調査では、“水滸伝”関連の番付が歌舞伎の番付を中心に172件見つかる一方、“三国志”に関連する番付は14件に留まる。“三国志”関連番付に含まれる「通俗妓容三国志」は『三国志演義』の内容を外れていたようで、ここでの“三国志”は群雄割拠する物語の意であったようだ。

また、伊原敏郎『歌舞伎年表』<sup>18)</sup>によれば、宝永6(1709)年に「三国志」という演目が上演<sup>19)</sup>されており、これは『通俗三国志』を基にしたものと思われる。

『歌舞伎年表』には“水滸伝”の語が入った演目についても記述があり、最も古い記録は享和2(1802)年の上演<sup>20)</sup>だが、これは小説『水滸伝』とは関係の無い日本を舞台にした話であったようだ。江戸時代には建部綾足の『本朝水滸伝』等、“水滸伝”の名前と雰囲気借りた作品が登場していた。こうした“水滸伝”の名前や雰囲気借りた作品の広まりにより、“水滸伝”の語は「豪傑の集まり」という意味で一般に浸透していたと推測される。

### 2-4. 総括

浮世絵の数量的調査から江戸時代には“水滸伝”の方が親しまれていた可能性が示された。更に詳細に“水滸伝”関連の浮世絵1097件を分析すると、小説『水滸伝』に忠実な物が約6割、“水滸伝”の名前だけを借りた日本物が約4割で、小説『水滸伝』に忠実な物だけでも“三国志”のそれを遙かに上回った。

ただし“水滸伝”については内容を離れ「豪傑の集まり」の意での使用が多数確認出来る。浮世絵でも歌舞伎でも、“三国志”はそのまま中国の物語として描かれ、“水滸伝”はイメージだけが引き継がれた印象が強い。その点で小説『水滸伝』の具体的な浸透度は不明確だが、少なくとも“水滸伝”の語と「豪傑の集まり」の意は江戸時代の庶民に広く浸透していたと推定される。

今回十分に触れられなかった浄瑠璃や講談等も庶民への普及に大きな役割を果たしたと考えられ、今後の調査が求められる。

### 3. 発表の回顧と所感

本発表では、浮世絵や歌舞伎における“三国志”と“水滸伝”の状況分析により、江戸時代には今日とは異なり“水滸伝”の方が人気を集めていたことが明らかにされた。

質疑応答では、江戸時代における“水滸伝”の人気要因や、浮世絵や絵本における中国風の絵の普及について、活発な議論が行われた。前者では、特に天保以降の芸能や文芸における侠客の人気、商業的に展開しやすいシリーズ物作品、度重なる翻訳に加え歌舞伎や絵本・浮世絵でのビジュアル化等が“水滸伝”の人気に寄与した可能性が指摘された。また後者では、

日本の浮世絵・絵本の絵師は中国の版本や絵画に学んでいたと考えられ、明・清時代の上図下文形式の版本や蘇州版画等が具体的な対象として言及された。

本研究は、ARC のデータベースを活用することで、大量の浮世絵や番付を調査し、数量による全体的な傾向と個別の分析の両面から江戸時代の”三国志”と”水滸伝”の浸透状況を検討した点に特徴があり、データベースを効果的に活用した事例として注目される。質疑応答で俎上に上った問題や発表最後に触れられた歌舞伎以外の芸能の影響についても、地域・時代を問わず多様で膨大な資料と情報に当たることが出来るデータベースの活用が有効と考えられる。

加えて、本研究は中国文学の研究者が、異分野である浮世絵・歌舞伎研究分野へ参入した研究ともいえよう。本発表でも指摘されたように、”三国志”や”水滸伝”をはじめ、中国文学作品を題材にした絵画や芸能は日本に数多く存在しており、これらの文芸に対する中国文学研究者が持つ知識や洞察力を通じて新たな見方や解釈が生まれることにも期待が高まる。

今後もデータベースを駆使した調査により”三国志”と”水滸伝”、更には広く中国文学作品のビジュアル面も含めた日本への受容の様子が明らかにされると共に、中国と日本という国を越えた俯瞰的な視点からこれらの文芸を捉えた研究の進展が期待される。

#### [注]

- 1) 立命館大学学長特別補佐、文学部教授
- 2) 立命館大学アート・リサーチセンター「第 115 回国際 ARC セミナー(Web 配信)  
<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/j/news/pc/016390.html>
- 3) 氏は例として、李商隠「馬喬児」詩「或諧張飛胡」を挙げられた。これは「張飛の髭面を嘲り笑い」の意であり、張飛は関羽と共に劉備に使えた三国時代の蜀の武将で、豪傑で勇猛な人物として伝わる。この句は子供がそのように言っているとの内容であることから、当時子供でも張飛のことを知っていたことが読み取れ、そのような普及には芸能の影響があったことが推測されると述べられた。
- 4) 氏は小説『三国志演義』の日本への流入と受容に関する研究者として、長澤規矩也、中村幸彦、徳田武、井上泰山、中川論、上田望各氏の名前を挙げられ、中国にも研究者がいることを述べられた。
- 5) 江戸初期の儒者。
- 6) 完結は元禄 5(1692)年。なお本書は中国白話小説初の日本語訳でもあった。
- 7) 戴斗は葛飾北斎が名乗ったことのある名だが、『絵本通俗三国志』の挿絵を描いたのは、北斎の弟子の二代目戴斗である。
- 8) 本作は翻訳ではなく、設定を借りた創作小説である。本作の新聞連載は昭和 14(1939)年から昭和 18(1943)年までのことだったが、その後単行本、文庫本として出版され続けた。
- 9) 小説『水滸伝』の流入、受容については高島俊男『水滸伝と日本人』(筑摩書房、2006)に詳しい。
- 10) 戦後(1945 年以降)に『水滸伝』の翻訳を試みた中国文学研究の大家である吉川幸次郎をして、「岡島冠山以来、多くの先賢の努力が存在するにも拘らず、難解の条はなほ甚だ多いのであって、実はあてずっぽうの訳が少くない。」(岩波文庫『水滸伝』第一冊まえがき)と言わしめている。
- 11) 岡島冠山の訓点本『忠義水滸伝』、同じく岡島冠山の翻訳本『通俗忠義水滸伝』(1757-1790)、陶山南濤『忠義水滸伝解』、荻生徂徠(徂徠の号である物茂卿が著者となっているが偽作か)『水滸伝解』、曲亭馬琴『新編水滸画伝』、高知平山『評論出像水滸伝』等、枚挙に暇がない。
- 12) 立命館大学アート・リサーチセンター浮世絵ポータルデータベース  
[https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search\\_portal.php?enter=portal&lang=ja](https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_portal.php?enter=portal&lang=ja)
- 13) 重複作品も含む。
- 14) “三国志”のパロディである『讃樟史』という洒落本が出されたが、本作もあくまで“三国志”を基にしたものである。
- 15) 国芳は「通俗水滸伝豪傑百八人」のシリーズで人気を博した。「三国志」よりも「水滸伝」を先に描いている。
- 16) 架空の人物も含む。
- 17) 立命館大学アート・リサーチセンター番付ポータルデータベース  
[https://www.dh-jac.net/db1/ban/search\\_portal.php](https://www.dh-jac.net/db1/ban/search_portal.php)  
番付とは歌舞伎や浄瑠璃、相撲等の興行に当たって宣伝等の目的で出されたポスターやチラシ、パンフレット等のこと。
- 18) 伊原敏郎『歌舞伎年表 全 8 巻』(岩波書店、1956-1963)
- 19) 宝永 6(1709)年夏、大阪・嵐座(伊原敏郎『歌舞伎年表 1 巻』(岩波書店、1956)p.379)
- 20) 享和 2(1802)年 9 月、大阪・博労町稻荷社内の寄進芝居(伊原敏郎『歌舞伎年表 5 巻』(岩波書店、1960)p.322)

\*URL は全て 2023 年 7 月 13 日最終閲覧